水俣学通信

第 26 号
2011.12.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies

カナダ 先住民族居留地　ホワイトドッグ（写真 2010.3 水俣学研究センター）

目　次

カナダ先住民族被害者の日本、水俣訪問を終えての談話 …… 2

報告：
水俣学若手研究セミナーに参加して …… 3
番園寛也

タイMTPプロジェクトの経過報告(2)：
トヨタ財団アジア隣人プログラム
２年目の中間報告 …… 4
中地重晴

客員研究員紹介：
「私と水俣病」 …… 5
頼藤貴志

第26回労働資料協総会開催 …… 6

現地研究センター便り …… 7
宮北隆志

こぼれ話：
マルタの甘夏：もう一つの1956年 …… 7

第７回 水俣病事件研究交流集会のご案内 …… 8

水俣学研究センター日録 …… 8

熊本学園大学水俣学研究センター

カナダ先住民族被害者の日本、水俣訪問を終えての談話（2011年９月23日）

私たち、３人のカナダ先住民は、熊本学園大学水俣学研究センターの招聘を受け、日本の三都市での講演の旅から帰国した。これは大類義監督のドキュメンタリー映画『水銀の傷痕（日本での公開題名は「カナダ水俣病」）』の上映と合わせて実現されたものであった。私たち、Asubpeeschoseewagong（グラッシー・ナロウズの先住言語表記）とWabaseemoong（ホワイトドッグの先住言語表記）の代表団は2011年９月６日から18日まで日本に滞在した。

グラッシー・ナロウズのチーフ（族長）、サイモン・R・フォビスター氏の話

「私たちは、自分たちの水銀中毒の経験と水俣病という病について、日本の人々に伝える機会を得ることができた。水俣病が地球上にこんなに広がっていることに驚いている人もいた。また、日本では、私たちよりもよい補償システムと医療保障がなされており、自分たちの２つのコミュニティでも日本と同様のシステムを求めるべきではないかと考えさせられた。」

グラッシー・ナロウズの代表、ジュディ・ダ・シルバ氏の話

「私たちはなお正義のために闘っている。私たちの川に流された水銀は、私たちの体をむしばみ続けている。私たちは、自らの土地、自らの生活と命を自らの手に取り戻すことを求めている。それによって、強制寄宿学校、水銀汚染、資源収奪、森林過剰伐採が私たちの文化、私たちの暮らし、はたまた私たちの身体に及ぼした被害を癒すことができる。」

ホワイトドッグの代表、シルヴィア・ヘンリー・モリソー氏の話

「私たちは、産業による環境破壊、さらには破壊的な水銀汚染という日本の水俣の人々との共通の歴史を通して、お互いにつながっている。この水銀汚染は、いまも、私たちのコミュニティを脅かし、私たちの暮らしのあり方をゆがめ続けている。土地、水、動物、人々、あらゆる種類の私たちの生活様式、そして生活そのものに被害が及んでいる。」

私たちの日程は、患者家族の訪問、公開の集会での講演、水俣病の専門家の原田医師とのミーティングなどでぎっしり詰まっていた。今回の旅では、学んだものは大きく、また生活環境も変わり刺激的だった。

私たちは、熊本学園大学の受け入れチームと出会い、熊本で過ごした。この受け入れチームは、水俣病を研究している研究者たち、研究助手たちやその仲間、そして原田先生や花田先生を含む研究センターのメンバーである。ついで水俣で数日過ごした後、最後に東京に滞在した。

私たちは、偉大なる栄誉をもって迎えられ、滞在環境もよく、大変丁重な扱いを受けた。そのおかげで、水俣病に関して、日本でよくコミュニケーションがとれる素晴らしい人たちと出会うことができ、水俣病が私たちと同じような状況にあることも知ることができた。

私たちは、日本では、証人として語る側であったし、また情報を得る側でもあった。日本の水俣で起きた水俣病（水銀中毒）のパワーポイントや（当事者の）証言を通して、学ぶことができた。私たちは、私たちのコミュニティがどれほど水俣病にリンクしているか知ることができた。水俣病（の症状の現れ方）と私たちのコミュニティの（症状の出現率）がそっくりだったという事実が、私たちにとっては極めてはっきりしたものとなった。日本の医者たちから入手し得た情報は、詳細な数値や図表によって、（原田医師らの）1975年、2004年、2010年のグラッシー・ナロウズの訪問時の検診調査と日本での水俣病が同じであることを示している。私たちは日本の医師たちが再びワバセンムーン（ホワイトドッグ）住民の被害調査に来てくださる日が来ることを期待している。

私たちが今回の旅で得たものは計り知れなく大きく、決して忘れないだろう。

大類義監督のドキュメンタリー映画『カナダ先住民と水俣病』DVD販売

環境ネットワークくまもと で販売しております。
販売価格 2,000円
送料（140円）＋振込手数料をご負担頂きます。
購入ご希望の方は、①住所（郵便番号含む）、②氏名、③連絡先（電話・メールアドレス）、④必要枚数をご記入の上、お申し込みください。（FAX、メールで受付）

環境ネットワークくまもと
Tel/Fax 096－362－3776
Mail home@kankuma.jp

《報 告》

水俣学若手研究セミナーに参加して

一橋大学大学院言語社会研究科修士課程　番 園 寛 也

2011年９月１日から９月４日にかけて熊本学園大学水俣学研究センター主催の水俣学若手研究セミナーが開催されました。全国から18名の参加者がそれぞれ異なった興味・関心を持ちより、講義とフィールドワークに参加しながら活発に意見を交換する４日間となりました。

私は普段、東京の大学で、身体表象、特に障害を持った身体の表象に関心を持ち、障害理論（障害学）を中心に研究をしています。現在執筆中の修士論文では土本典昭監督の『医学としての水俣病』三部作における水俣病患者の身体表象を分析しています。そうした私自身の研究上の関心もあり、今回のセミナーに参加させていただきました。本稿では、セミナーの中で感じたことを述べさせていただきたいと思います。

今回のセミナーは７人の講師の方々による講義とフィールドワーク、そしてそれらをもとにした参加者と講師による議論で構成されました。法学・教育・医学・地域社会・チッソ・地域戦略などの多岐にわたる観点から展開された講義では、不知火海沿岸に住み、漁業や農業などに携わって生きてきた水俣病患者たちの生がどのようなものであったのか、そして水俣病がその生をどのような形で脅かし、破壊してきたのか、そして今後どのようによりよい生を模索していけるのかという水俣病をめぐる重層的な問題系が提示されたことが非常に印象的でした。講義の中では一つの専門分野だけでなく異なった分野同士の知見が関連づけられていくことで、より水俣病の複雑さが見えるようになり、「水俣学」という取り組みの重要性が強く感じられました。こうした重層的な問題系の整理とそれらにアプローチしていくための一定の基礎となる知見が体系化されることは、あらゆるディシプリンからの〈水俣〉研究にとって必要不可欠なことであると思います。

特に山下善寛さんのご案内で水俣病に関連した場所に実際に行くというフィールドワークでは、それぞれの場所の意味、歴史的位置づけがわかるだけでなく、時間の流れの中で水俣病の経済的・法的・医学・科学的背景がそれぞれの場所で複雑に絡まり合っていることが強く実感できました。私にとっては２度目の水俣訪問だったのですが、以前一人で来たときにはない気付きが数多くありました。それらの場所の意味を解説していただき、関連づけてみていくことで水俣病事件の舞台となった〈水俣〉という土地を立体的に知ることができました。とりわけ八幡のカーバイド残渣プールや2003年に高濃度のダイオキシンが検出されたという百間排水路などを案内していただいたことが印象に残っています。水俣病公式確認から50年、その前史まで含めれば100年以上の時間が経過した今も水俣市内にチッソを中心とした水俣病を生じせしめた構造が現存していることを、その場所に行くことを通じて目に見える形で実感しました。このことは「水俣病は終わっていない」という言葉の意味を再度考えるきっかけとなりました。

セミナー参加を通して今後の課題として見えてきたのは、現在の研究においてジェンダー・セクシュアリティの視点から〈水俣〉を分析したものが極めて少ないということです。自分自身の研究に関連し、論文などを調べていて実感していたことでもありましたが（社会科学･人文科学的な研究自体が少ないのですが）、かなり高い水準で水俣研究の概観ができた今回のセミナーでさらにその印象は深まりました。新潟水俣病における妊娠中絶や妊娠制限の事例など水俣病をめぐる言説の中の再生産という主題やチッソの女性労働者のありようがどのようなものであったのかなど、重要な問題が水俣のジェンダー・セクシュアリティ研究にはまだ手つかずで残されていると感じます。自分自身の研究においてもジェンダー・セクシュアリティの視点も含め、どのような研究を添加できるか模索していきたいと考えています。

今回のセミナー参加で一つの研究の基盤となるような体系的な学びが出来ただけでなく、今後の研究を進めていく上で重要なネットワークを形成できました。特に水俣から遠くはなれて、東京で研究生活を行っている私にとっては、水俣で現地を拠点に情報交換や交流が出来たことは非常に大きい経験でした。これは私自身にとってプラスであっただけではなく、他の参加者の方々にとっても同様の意味があったと思います。またこのような機会が定期的に用意されることは水俣学が今後発展していく上でも不可欠な要素であると思います。今後も継続してこのような場が持たれることを強く希望いたします。

《タイMTPプロジェクトの経過報告(2)》

トヨタ財団アジア隣人プログラム　2年目の中間報告

社会福祉学部教授
（水俣学研究センター研究員）　中　地　重　晴

この1年間の調査内容

2009年11月よりトヨタ財団アジア隣人プログラムの助成を受けてスタートしたタイMTPプロジェクト（タイ東部工業地域Map Ta Phutでの工業団地と共存できる地域づくりのあり方の検討とリスクコミュニケーションの実践）は、当初2年間で助成が終了する予定でしたが、タイの内政混乱などがあり、計画より若干遅れ気味で、今年度末（来年3月末）まで助成期間が延長され、調査活動を実施しています。

2年目は昨年12月、本年1月、3月、7月の計4回タイを訪問しています。簡単に訪問先、内容をまとめると、昨年12月24日～27日はバンコク、ラヨーン県を1月のマプタプット現地での住民向けセミナー、関係者との討論会の打ち合わせのために訪問しました。とくに、EARTHと今後の進め方について、時間をかけて協議しました。

本年1月18日～23日の訪問では、水俣学研究センターの主要メンバー（花田、宮北、丸山、中地、藤本、田?、井上）が参加し、20日にはマプタプット病院にて、「産業公害に関する情報の共有と地域コミュニティのエンパワメント」をテーマに住民向けのセミナーを開催しました。翌21日には、調査の協力者の東部住民連合及びEARTH関係者と、調査結果の報告と調査計画についての討論集会を開催しました。内容は、水俣学通信24号で宮北現地研究センター長が報告しています。

3月14日から24日の訪問では、ラヨーン県の工業用水の貯水池からマプタプット工業団地までの水質調査を実施しました。乾季で貯水池の貯水量が減少していることを確認するとともに、アオコ（淡水赤潮）の発生に伴い、やや水質が悪化していることを確認しました。また、ラヨーン県東部のICRPという民間が建設した工業団地の拡張問題に反対しているバンチャン地区の周辺住民への聞き取りを行い、普段飲用している井戸水の簡易検査を実施しました。周辺は果樹園になっており、工業団地進出前の農業地域の面影をとどめていました。

7月30日から8月3日には、花田、宮北、中地がバンコク及びラヨーン県を訪問し、EARTHとの研究成果の共有を図るための討論と本年度末までに研究成果のまとめのワークショップを開催することについての議論を行いました。また、最近新たに委員会ができ、検討中であるマプタプット市の都市計画、工業団地の拡張計画の見直しについてパラニーさんから説明を受けました。パラニーさんは都市計画の専門家で、もともと政府機関で仕事をした経験があり、工業団地と住民居住地域との間に緩衝地帯を設け、工業団地の拡張を極力小規模にとどめるよう、委員として働きかけているとのことでした。

バンチャン地区住民へのヒアリング 2011.3

タイの環境資源省の環境保護局（PDC）を訪問し、担当者からマプタプット工業団地周辺の大気や水質の現状及びタイ政府の取組みについて報告を受けました。

これまでの成果

今までの調査研究活動の中で、整理できた内容は、「①マプタプット工業団地と周辺地域との地理的関係（人口、就業状況など）、②工業団地用水と河川の水質汚染の現状把握と、住民による調査の実施、③マプタプット工業団地と地域住民とのつながり（工場が実施している地域住民対策）、④工業団地に関する住民運動の実態、⑤今後の地域計画の存在、PRTR制度の導入など、国、行政の取り組みの現状」で、工業団地周辺地域の社会学的調査は追加調査の必要があると認識しています。

今後の予定

本プロジェクトの到達目標はマプタプット地域における工場と地域住民との共存、リスクコミュニケーションの実施にあり、本年1月、住民（東部住民連合）と大学関係者の間での意見交換、セミナーが開催できましたが、工場側や行政が同席したすべての利害関係者がそろった工場の操業に関するセミナー、いわゆるリスクコミュニケーションの開催を追求するべきだと考えています。

そのために、日本におけるリスコミ及びPRTRの現状をまとめたレポートを作成し、セミナーに向けた事前学習の資料を提供したうえで、来年2月ごろに、都市計画の変更問題や地域住民の健康問題に取り組んでいる病院、行政関係者と住民、できれば工場関係者も同席したセミナーの開催をまとめのセミナーと位置付けて、開催できるように、準備を進めています。

《客員研究員紹介》

「私と水俣病」

岡山大学大学院環境学研究科准教授
（水俣学研究センター客員研究員）　頼 藤 貴 志

私は、岡山大学大学院環境学研究科に所属しています。専門は疫学で、水俣病のことも微力ながら関わらせて頂いている所です。

私は元々熊本県出身で、水俣に近い八代で育ちました。小さい頃にはよく水俣にキャンプに行っていました。高校の同級生に水俣出身の友達もいました。そんな僕でさえ小・中・高校生の時は水俣病という出来事は自分には関係のない他人事でした。水俣病に関心を持ち始めたのは、大学１年生の時にＹＭＣＡの主催するスタディツアーに参加し、タイの人々を取り巻くエイズやスラム、職業病、売春などの問題に触れた時に、社会的な要因が疾患を作り出していくということを痛感してからでした。それまでそういうことを実感したことのなかった大学１年生の私にとって、それは衝撃でとても混乱したのを覚えています。その後、知人より原田正純先生が書かれた「水俣の視図」を紹介して頂き、その本で描かれている、水俣病を社会的な要因が作り出していく様にタイで見たものとの共通点を感じ、水俣病を知ると自分の混乱が少しでも解消するのではないかと思ったのを覚えています。それから、原田先生の研究室を訪ね勉強会を開催させて頂いたり、水俣に通い特に胎児性の患者さんと交流させて頂いたり、浴野先生や二宮先生の研究室にお邪魔させて頂き水俣病と関わってきました。それら学生生活の経験が、現在水俣病に関わらせて頂いているきっかけとなっております。その後、大学を卒業後、小児科医を経験し、津田先生を頼り岡山大学大学院に入学し、現在へ至っております。

研究の領域は疫学・環境疫学・周産期疫学・小児保健（小児科）であり、主に水俣病（メチル水銀中毒）の疫学や大気汚染の疫学など、環境要因が人の健康にどのように影響を及ぼすのかを定量的に評価する研究を行っています。

水俣病に関しましては、主に現在までは1971年熊本大学医学部が行った10年後の水俣病研究班において神経精神科が中心になって集めた調査を再解析してきました。その調査は、水俣・御所浦・有明地域のある対象地域の全数の住民を対象にした調査です。私たちの領域では、地域の悉皆調査といい、地域の実情をしっかりと反映する（代表性がある）質の高い調査であるといえます。この調査では、汚染が少ない地域として有明地域がコントロール地域として設定されていました。当研究班の報告書において立津先生らがしっかりとまとめていらっしゃいますが、私たちの再解析から次のことを補足・追加しております。

1．メチル水銀曝露により中枢性の感覚障害が水俣地域で多発しており、水俣地域程ではないにしても、御所浦地域でも多発が見られていた。
2．1960年の不知火海沿岸の毛髪水銀濃度調査と1971年の当研究班のデータをリンクすると、1960年当時の毛髪水銀濃度が50ppm以下の人の間でも感覚障害が生じていたということ
3．症状の組み合わせを求める昭和52年判断条件で認定されていない人達の中にも感覚障害を持つ人が多数いること。認定制度は感度が低く、特異度が高い条件であるということ（厳しすぎる条件であること）。
4．感覚障害だけでなく、集中力や判断力の低下、性格障害などの精神症状も影響を受けていること。また、それらは1971年調査当時に高齢だった方、また20歳前後の人に多いことを示しており、胎児期世代に曝露を受けた方に影響が強いのではないかということを示唆していること。
5．また、高血圧の方も水俣地域に居住されている人の中で多発していること。

その他、水俣病に関しては、原田先生のデータを利用し臍帯水銀濃度がどのように分布しているかを検討したり、がんや高血圧疾患死亡の増加の有無などを検討したりしてきました。また、水俣病の歴史を原田先生や津田先生と海外に紹介したり、海外の教科書執筆などに関わらせてもらったりしております。

最後になりますが、私が今一番関心を持っているのは胎児期世代にメチル水銀の曝露（特に低～中程度の曝露）を受けた方たちへどのような影響があったのかということです。この夏も熊本学園大学の皆様の企画のおかげで、胎児期世代に曝露を受けた方のお話を聞くことができましたが、このまま低～中程度の曝露を受けた人たちの症状が明確にされないまま終わってしまっていいものかと考えている所です。

今後も色々と教えて頂くことがたくさんあるかと思いますが、宜しくお願いいたします。少しでも現地に行ってお話を聞かせて頂けると幸いです。

《報 告》

第26回労働資料協総会開催

社会福祉学部教授
（水俣学研究センター長） 花 田 昌 宣

10月20日、21日の２日間にわたって、水俣学研究センターが開催校となり、社会・労働関係資料センター連絡協議会（略称：労働資料協）第26回総会ならびに研修会が開かれた。

当センターは一昨年、法政大学大原社研の協力を得て市ヶ谷校舎で新日窒労組資料展を開催した機縁で労働資料協に加入し、昨年、開催された総会において本年度、本学で総会開催を引き受けたもの。総会には、法政大学大原社研、東京大学経済学図書館、労働政策研究・研究機構（JIL）、同志社大学人文研究所、大阪エルライブラリー、日本労働会館・友愛労働歴史館、労働者運動資料室など加盟組織及び個人20名が出席。

20日午後１時より、五十嵐大原社研所長（労働資料協代表幹事）の挨拶の後、JILの片桐さんの司会のもと経過報告、会計報告、次年度活動計画及び予算案の審議等の総会行事が滞りなく進められた。その後、それぞれの資料センターや図書室から現状報告を受け、研修へと移った。

花田（水俣学研究センター長）より、歓迎の挨拶と水俣学研究センターの紹介。ついで、山本尚友（本センター研究員）より、水俣学研究センターの資料について、資料整理の進捗状況、方法、今後の課題について、出席会員にむけて報告を行い、現地センターに架蔵されている資料群の説明を、山下善寛（水俣学研究センター客員研究員）氏が行った。質疑は、所蔵方法や技術に関してよりは資料の一つ一つの内容にわたり、日本の労働資料アーカイブのトップクラスの面々に、このような単組資料が丁寧に所蔵されかつ利用可能となっていることを理解していただけたものと思う。

その後、学園バスで、水俣市内での現地研修。百間排水口で説明を受けた後、水俣病資料館を見学。ついで、チッソゆかりの旧工場（創業の地）、チッソ専用港の梅戸港、八幡残渣プール、埋立地の産業団地を視察。翌21日は、午前中チッソ（現JNC）の工場見学。チッソでは、木戸理恵氏の説明の後、バスで工場内を一周。その後、患者多発漁村へ向かい、坪谷、湯堂、茂道を回った。茂道では、水俣病患者互助会の佐藤英樹さんが出てきてくださり、茂道の海を背景にご自身の被害と訴訟について語ってくれた。

労働資料協の研修としては異色だったかもしれないが、資料の背後にある事実の風景を見ることを通して、資料の持つ意味を改めて考える機会となったのではないかと思う。水俣学研究センターとしては、このような研究資料アーカイブのネットワークの中で、学術的な役割を果たすとともに社会的な発信を今後も続けて行きたいと考えている。

所蔵の貴重資料に見入る参加者達

水俣学データベース化作業の進捗状況

水俣学研究センターは、水俣学関係資料の収集、整理、公開を第３プロジェクトと位置づけ、その中の一つ、新日窒労組資料のデータベース化と公開を鋭意進めている。

本年度、成果公開科研に採択され、当初の計画に従って本学所蔵の資料のデータベース化を順調に進めている。現在刊行中の新日窒労組機関紙『さいれん』の復刻にあわせた記事目録の作成は、第５期分までメタデータの入力が終了し、現在校正中。物品（バッジ、組合旗、印刷用具、看板等）約200点についてはメタデータ作成が終了しており、データの校正と利用マニュアルづくりに入った。また、資料中に残されていた６万点近い写真に関しては、水俣で元組合員（山下さん、徳永さん、緒方さんら）が作成している写真目録のデータ化をしており、これについても、現在7,465点のデータ入力が完成している。さらに、これらの写真をベースに写真で見る労組の歴史を作成する作業については、写真の選定を終え、これから編集作業に入る。一方、組合に残されていた映像資料（８ミリフィルム）に関しては、デジタル化し、ＨＰにアップできるように５分ずつに編集し直しているところだ。これには、アルバイトの宮澄さん、中浦さん、本岡さんが当たっており、今後順次データベースにアップして行き来年２月には、本年度の予定をほぼ完成できる予定。

水俣学現地研究センター便り

水俣学現地研究センター長　宮 北 隆 志

本学（熊本市）の水俣学研究センターと水俣をつなぐ研究拠点としての水俣学現地研究センターが、水俣市浜町に開設されて丸６年が経過しました。現地研究センターは、国内外の研究者にも広く開放された施設であると同時に、地元市民の皆さんも気軽に足を運ぶことのできる交流の場として活用されてきました。この数ヶ月を振り返ってみるだけでも、日常業務に加えて、セミナー開催や研修受け入れ、またそのサポートなどで大忙しです。

７月には、今年６月に台湾の国立成功大学で開催された国際会議で初めて出会った、慶応義塾大学環境情報学部教授のティースマイヤ・リン教授、並びに、学生・大学院生20名を迎え、「環境・健康被害とガバナンス」に関する意見交換の場を持ちました。

９月には、「水俣学若手研究セミナー」、「カナダ先住民と水俣病」映画上映会と講演会・交流会を開催すると共に、水俣市が毎年開催しているJICA研修の受け入れも行いました。「水俣病の現在と水俣学の試み」をテーマとする若手研究セミナーには、熊本、久留米、北九州、岡山、神戸、京都、四日市、長野、東京など全国から、幅広い年齢層（23歳～73歳）の若手（？）研究者18名が参加し、「地域に根ざし現地に学び、負の経験を将来に活かすことをめざす水俣学」に関わる熱い議論が４日間にわたって展開されました。

また、「カナダ先住民と水俣病」をタイトルとする映画の制作者である大類義氏（カナダ在住）と、オンタリオ州グラッシー・ナロウズ、並びに、ホワイトドッグの両居留地で40年余にわたって水銀汚染と向き合ってきた４名の先住民の皆さんと水俣病被害者との再会、交流では、困難であっても闘いの継続が重要であることが確認されました。

「住民協働による環境都市づくり」をテーマとするJICA研修には、ブラジル、メキシコ、モロッコ、シリアから、公共政策、都市計画、自然環境などを担当する、国・自治体職員５名の参加があり、市民参加の仕組づくりや場づくりについて沢山の質問を受けました。

10月に入って、毎年恒例の公開講座が、今期は「地域をつくる」をテーマとして毎週火曜日に５週連続で開催されました。丸山教授のコーディネートのもと、「行政に頼らない公民館運動」、「首長のリーダーシップを活かした市民協働の取り組み」などの事例紹介と、「希望とは何か」という問いかけなどをもとに議論がなされ、講座修了後の講師を囲んでの懇親会にも沢山の参加がありました。

《こぼれ話》

マルタの甘夏：もう一つの1956年

1956（昭和31）年は水俣病発生の公式確認の年とされています。日本の高度経済成長の起点にも当たるこの年には、水俣、芦北地方でもいろいろなことが起きています。たとえば、この年、水俣港が貿易港として開港したことはよく知られていることでしょう。

実はこの年は、農業分野でも重要なことが起きています。現在、芦北、水俣の特産の甘夏みかんがこの地に導入されたのは、1949年と言われています。田浦町の篤農家鶴田源志氏が大分県津久見の川野夏橙（かわのなつだいだい）の穂木（ほぎ：接ぎ木する枝木のこと）を譲り受けたのが始まりです。その「○に田の字」のロゴ付きのマルタの甘夏が熊本県農作物の奨励品種に選定されたのが1956年だったのです。この年から、田崎市場や鶴屋デパートでの猛烈な宣伝が始まり、パレード等も行われました。1959年には東京銀座に進出します。その宣伝に一役買ったのが料理研究家の江上トミ氏でした。テレビ熊本の「日本の食卓を変えた火の国の女」というドラマで取り上げられましたので、若い方もご存知かもしれません。1958年町制施行後の初代田浦町長藤崎弥熊の姉であった江上トミ氏が協力したという次第です。（H）

最初の甘夏ポスター

写真は『新・熊本の歴史』第９巻
熊本日日新聞社、1983年より

第７回 水俣病事件研究交流集会のご案内

水俣病事件に関心をよせる様々な人々、研究者、実践家、患者、特に若手の研究者の自由で堅苦しくない水俣病研究交流の場を設け、専門家・素人の枠を取り外し、学問の壁を取り外し、広く討論することを目的とし下記の要領で開催いたします。

今回は、最近のさまざまな出来事や状況の変化を踏まえて、水俣からの視座を大切にしつつ、現在進んでいる第二の政治解決、被害救済と補償の検討、「地域振興」策とまちづくり、東北大震災・原発事故と水俣などが中心となる予定です。

開催日時：2012年１月７日（土）　12：00～17：00
　　８日（日）　９：30～15：00
場　　所：水俣市公民館ホール（水俣市浜町2－10－26）
資 料 代：1,000円
懇 親 会：スカイレストランえむず
　　男性3,150円　女性2,300円

＊参加申し込みなど詳細は、当センターホームページをご覧ください。

担当：水俣学研究センター　田尻
mtajiri@kumagaku.ac.jp

水俣学研究センター日録

7月

5日　ゼロ・ウェイスト円卓会議：藤本（水俣）
　　国水研及びエコネット水俣検討会：花田（水俣）
7？ 8日　女島予備調査：井上・田尻
9～10日　第28回天草環境会議（苓北）
12日　健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
13日　ＭＴＰ会議（大学）
13? 14日　女島予備調査：井上・田尻
15? 18日　女島本調査：原田・下地・花田・宮北・井上・田尻
16日　慶応大学受け入れ：宮北（水俣）
22日　胎児性世代の被害に関するＷＧ：花田・井上・田尻（大学）
24日　胎児性世代の被害に関するＷＧ：花田（水俣）
27? 28日　胎児性水俣病長島調査：田尻・山下・永野・阿南
27? 29日　女島予備調査：井上・田尻
30? 8月4日　タイMTP調査：花田・宮北・中地

8月

2？ 5日　女島予備調査：井上・田尻
3日　水俣芦北公害研究サークルとの研究会：花田・井上・田尻（水俣）
5日　胎児性水俣病長島調査：田尻・山下
6日　水俣芦北公害研究サークル勉強会：井上・田尻（水俣）
8日　環境モデル都市推進員会拡大委員会：宮北（水俣）
9日　健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
12日　第15回公開セミナー「『水俣病』を伝えるセミナー」：原田・花田・井上・田尻（水俣）
20? 21日　女島本調査：原田・下地・井上
19? 21日　共同連全国大会：花田・田尻（東京）
25日　第15回公開セミナー「『水俣病』を伝えるセミナー」その２：花田・井上・田尻（水俣）

9月

1～4日　水俣学若手研究セミナー「水俣病の現在と水俣学の試み」：（水俣）
4日　環境モデル都市会議：宮北・藤本（水俣）
7～18日　カナダ先住民招聘関係プログラム
9日　熊本学園大学学長表敬訪問／記者会見（大学）
10～11日　第16回公開セミナー「カナダ先住民と水俣病」（大学）（水俣）
12日　水俣市長表敬訪問／水俣病患者との交流（水俣）
13～14日　水俣病患者との交流・現地視察など（水俣）
16日　東京在住アイヌとの交流会／セミナー「環境と生活破壊に抗するカナダ先住民の現在」（東京）
17日　水俣フォーラムにて講演会と上映会（東京）
16～18日　新潟水俣病研究会：田尻（新潟）
17～18日　第84回日本社会学会：丸山（大阪）
22日　水俣学講義１回目　花田昌宣
27日　健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
　　JICA研修受け入れ：宮北（水俣）
28日　ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣）
29日　水俣学講義２回目：丸山定巳

編集後記

私は「忙殺」という言葉が嫌いだ。忙しさに眼を奪われず、足元のきちんと見える日々を送りたい。（M・T）

水俣学通信
第26号　2011.12.1

編　集／熊本学園大学水俣学研究センター　　発行人／花田　昌宣
連絡先／〒862-8680 熊本市大江2-5-1　熊本学園大学水俣学研究センター
Tel：096-364-8913(ダイアルイン)　Fax：096-364-8913
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/　E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
印　刷／ホープ印刷株式会社